

史跡 山中城跡

—北条流角馬出や障子堀の残る山城—

2002

三島市教育委員会

西の丸北堀



1. 山中城跡遠景



2. 山中城跡出土武器（槍・腰刀）



1. 山中城跡出土陶磁器 (中国産磁器、国内産瀬戸・美濃、初山、志戸呂窯陶器)

目次

I 山中城跡の発掘	1	II 山中城のプロフィール	10
1. 山中城の位置	1	1. 伊豆山中城「諸国古城之図」	10
2. 山中城の縄張	2	2. 山中城の創築・修築年代	11
3. 自然の谷も縄張に活用	3	3. 三の丸内を街道が通過	12
4. 土塁	4	4. 『渡辺水庵覚書』と鉄砲	13
5. 堀(障子堀)	5	5. 出土した三種類の鉄砲玉	14
6. 橋	6	6. 北条流の角馬出	15
7. 建物	7	7. 箱井戸と田尻の池	16
8. 出土遺物	8	8. 屋根に葵紋の宗閑寺	17

I 山中城跡の発掘

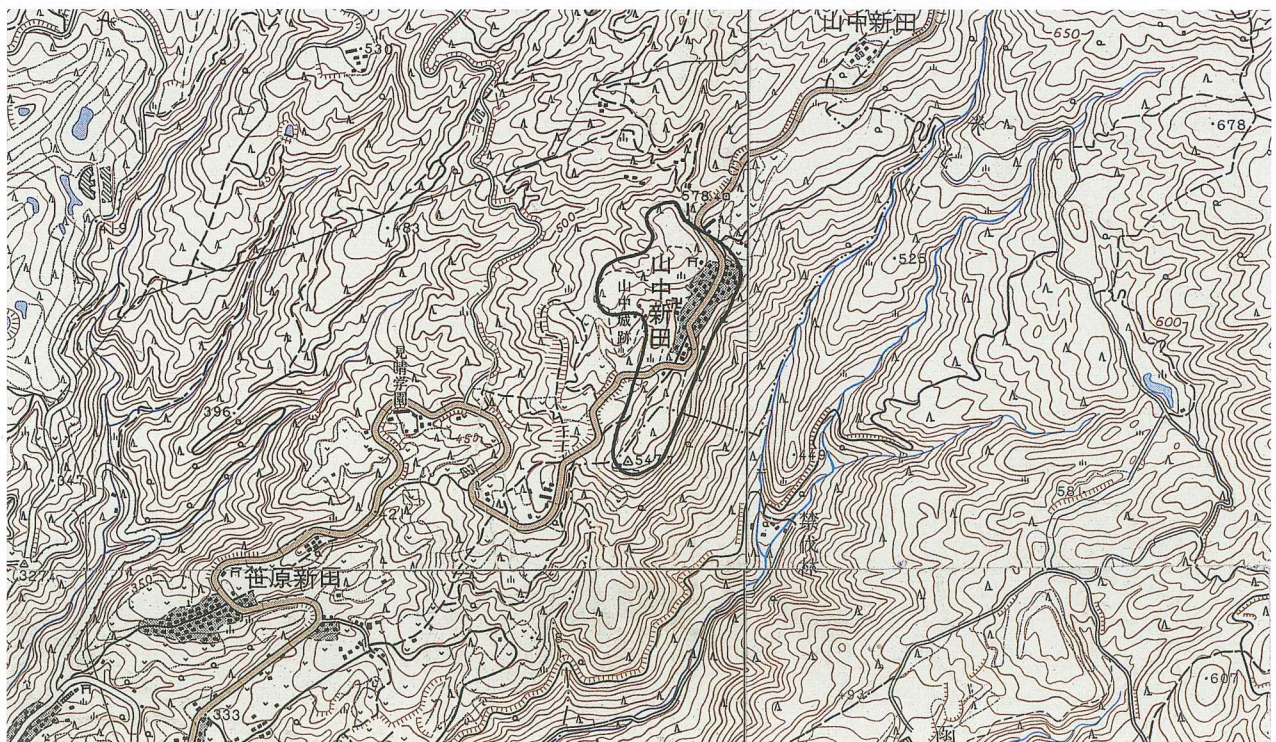
1. 山中城の位置

史跡山中城跡は、静岡県三島市字山中新田および田方郡函南町字桑原にまたがって所在している。三島駅からは約12km、小田原城からは西方約23km、標高約580mに位置する戦国時代末期の山城である。

山中城跡は、小田原に本拠を置き、関東地方をその領土とした後北条氏によって築城された国境警備の城、小田原本城の防衛に当たるいわゆる「境目の城」である。後北条氏の時代、伊豆には葦山城と山中城のほかに、下田城（下田市）・長浜城（沼津市）・丸山城（土肥町）などの著名な城があったが、戦国時代に限定するならば、山中城と葦山城はその双壁であった。後北条氏は箱根の「天下の險」を利用していくつかの支城を築いたが、山中城もその一つである。また、山中城は「繋ぎの城」としての役目を持ち、田方・駿東地方や箱根の東部に配置された戸倉城・葦山城・足柄城・浜井場城・鷹ノ巣城と、そして本城の小田原城を結ぶ重要なライン上にあったことはいままでもない。山中城も築城当初は「繋ぎの城」として関所的機能、つまり、交通監視的役割も具備していたのである。

山中城は、箱根山外輪山から南西方に伸びる丘陵の尾根を利用して築城されており、V字状溪谷をなす二つの河川を天然の堀として活用している。このため城の南北は急崖をなし、東西方向の尾根には、多くの堀を掘って防衛線としている。山城の特徴の一つに眺望の良さが上げられる。山中城からは駿河湾、三島・沼津平野など、伊豆地方北部から駿河地方一帯が眺望可能であり、その位置は最適地と言えよう。

山中城の範囲は東西1.7km、南北2.6kmに及び、面積は約20万㎡と推定されている。



山中城の位置 (1/25,000)

2. 山中城の縄張

山中城の縄張は、本丸を基点とし、放射状に分岐した三本の尾根を利用して各曲輪を配置した、変則的な連郭式山城である。

主尾根の中央に本丸を置き、北方にのびる尾根に、北の丸・ラオシバの各曲輪を配置し、北方小山の頂部に「物見番所」を設けて北の防備を固めている。

つぎに、主尾根である西尾根には、本丸から二の丸・元西櫓・西の丸・西櫓・帯曲輪・西木戸などの曲輪を配置し、西側の備えとした。また、南西の尾根には三の丸・南櫓・岱崎出丸などを配置した。全体としては「U」字状に南西方向に開く縄張りである。一つ一つの曲輪は、障子堀により分断されており、独立性の高いものとなっている。これらの曲輪間の連絡は、土橋または架橋により通行し、緊急連絡などは土塁の一角に設けられた物見台（見張り所）を活用したのであろう。

「障子堀」とともに北条流築城術の粹とも言われる「角馬出」も、山中城西部の最先端の曲輪である西櫓に認められる。

岱崎出丸は未完成ではあったが、「山中城は後北条氏による最も発達した理論的プランの城郭」としてその縄張りは高く評価されている。



山中城の地形と曲輪の配置

3. 自然の谷も縄張に活用

山中城では、三本の尾根を活用して巧みに曲輪配置がなされている。これら三本の尾根の間には、それぞれ湧水源^{ゆうすいげん}があって、大きく尾根を分岐する谷がつけられている。自然が長い時間をかけて開析^{かいせき}した遺産である。最近までこの谷の湧水源には水溜まりができていて、「山中城周辺に生息する猪^{いのしし}や鳥たちの水飲み場だった」と地元の古老は証言する。また山中城の北側では、ラオシバの乗る尾根と、西の丸の乗る尾根との間の谷に現在でも豊かな湧水源が認められる。ここはマムシの好む湿地でもある。

山中城南側の谷は、二の丸や既の曲輪が乗る尾根と、三の丸や出丸の乗る尾根との間の谷が巨大である。これを通称「箱井戸^{はこいど}の谷」と呼んでいる。また、二の丸と既の尾根と西の丸の尾根との間の谷も大きく、こちらは通称「丸井戸^{まるいど}の谷」と呼んでいる。

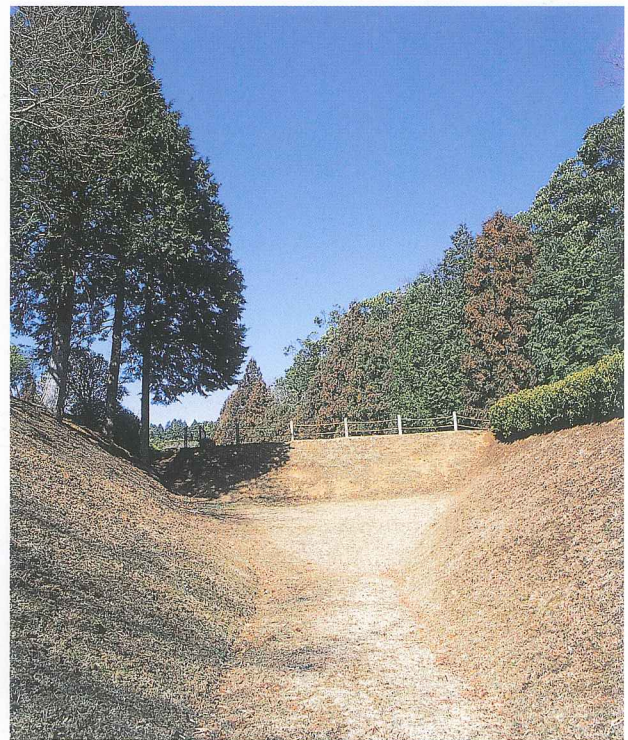
以上、三本の谷は山中城の城中深くまで入り込み、もし谷底道^{たにそこみち}を突進すれば、本丸に接近する最短距離となり誘導路ともなる。味方にとっては便利な谷底道も、戦闘時には敵が攻め込む危険きわまりない通路となるのである。そこで、自然の堀を戦略上見事に改良構築した一例を見てみよう。

後北条氏はこの箱井戸の谷を大改造し、戦闘時に活用できるようにした。まず、箱井戸周辺の湧水が開析した自然の谷の約半分を、もよりの土砂で人為的に埋め戻した。

この目的は、三島方面から侵入してきた敵軍はこの堀底道に沿って来るのであるが、その中途において高さ数メートルの堀留^{ほりどめ}の防御壁^{ぼうぎよへき}に突き当たり、大混乱に陥ったところを上方より攻撃する戦法である。さらに工夫されているのは、埋めた堀に隣接して、同規模の堀を新たに構築したことで、こちらは得意とする障子堀とし、侵入軍を二つの堀に分散させ、堀留と新堀の障子により混乱させようとする意図が伺えるのである。



復元された三の丸堀



三の丸堀の堀留

4. 土塁

山中城跡の土塁は、曲輪を囲む堀の掘削土を版築状くっさくど はんちくじょうに積み上げて構築している。本丸北側の大土塁は、きていはば基底幅15m、高さ4.5mの大きなものである。山中城における普通の曲輪の土塁規模は、高さ1.8m、法面勾配は概ね58度である。

土塁は曲輪内の遮蔽しゃへいするものにより、その高さを調節する。人間一人なら1.8mで良いが、馬に乗った大将ならば、倍以上の高さを必要とするので、大将のいる本丸土塁は巨大となるのである。

土塁は曲輪を守備する重要な施設であるとともに、敵を攻撃するのに都合のよい高さに調節することも構築上の重要な要素となっている。

土塁は曲輪の四周をくまなく巡るとは限らない。山中城の土塁は、敵の攻撃が想定される方向を正面にして、曲輪の三方を囲むコの字状の構築が基本となっている。これは、守備をしているその曲輪が敵の手にも渡っても、退却した次の曲輪から攻撃できるよう味方側の土塁を構築しないで開けておくのである。

山中城の土塁を調査してみると、頂部にあたる天端てんぱには、平均1.8m間隔に丸太材を立てた柱穴の跡が見つかる。多分、この穴に立てた丸太には、上下2～3段の横木よこぎが取り付けられ、柵さくや塀へいが作られていたものであろう。最初のころは、雑木の枝や葉がくくりつけられていたと推定されるが、火縄銃ひなわじゅうの使用とともに、玉避けに最適の、箱根竹はこねだけ（篠竹しのだけ）の束がくくりつけられるようになる。

渡辺勘兵衛わたなべかんべえの『渡辺水庵覚書わたなべすいあんおぼえがき』では、「さまのけむり（狭間の煙）、うすく（薄く）成り申し候」として、鉄砲狭間てっぽうざまが山中城の土塁上に所在したことを記録している。こうした施設は、板二枚の間に土や粘土をいれて土塀をつくり、そこに矢や鉄砲を発射する「矢狭間・鉄砲狭間やざま」を作る。かなり手数のかかる、精度の高い施設である。戦国時代の末期に位置する山中城は、こうした堅固な土塁の上に鉄砲狭間が作られ、守備と攻撃の両面を備えた山城であったことを示している。



本丸全景（左側：本丸大土塁）



二の丸への進入路

5. 堀（障子堀）

山中城における発掘調査の最大の成果は、障子堀しょうじぼりと呼ばれる堀の実態を明らかにしたことである。山中城は後北条氏の城の中でも、「理論的にもっとも洗練された最強の山城」と評価されているが、この障子堀の構築などはその典型である。江戸時代の軍学書には、「堀障子」とか、天保10年頃成立の『相中雜志そうちゅうぞうし』には「障子堀」などの記述が見られていたが、その実態は不明で「空堀の底に敵を残し敵の行動を阻害するもの」と漠然と考えられていた。山中城の発掘により、幻の障子堀が解明され復元されたのである。

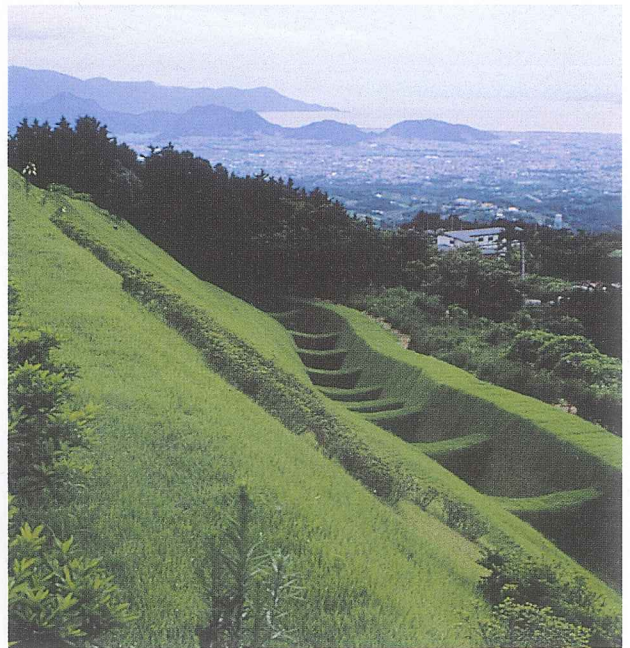
障子堀には単列と複列があり、単列の障子堀は西櫓にその典型がみられる。そこでは堀の中に高さ1.8mほどの畝を障壁として掘り残し、堀全体を畝により10区画している。和風の一般住宅において、部屋を区画するのは障子や襖ふすまである。このことから、堀を区画する畝を住宅の障子に例えたのであろう。

西櫓堀では、一区画の大きさが長さ8～9m、幅2m前後で、畝法面の傾斜は平均55度の急傾斜である。また、典型的な複数列の障子堀は西の丸西堀に見られる。堀の中央部に幅の広い畝を設け、この中央畝から両側に向かって直角に、そして交互に畝を伸ばしている。したがって障子の棧とはやや趣が異なる。各区画の長さは8～9mで、単列の障子堀とほぼ同一規模となっている。これら障子堀の一部は、地下水脈を掘り切り偶然に水堀となっていた区画があり、皮革製甲冑部品、建築部材、木製飲食器など、通常では残らない重要な遺物も出土している。

単列にしる複列にしる、仮に堀底へ転落した場合、この畝（障子）を乗り越えての脱出は不可能である。堀そのものの深さが9m以上あり、しかも地質がローム土であるため、滑りやすく素手でよじ登ることは困難である。まして甲冑を身にまとった重装備の兵士は、堀に落下したら蟻地獄に落ちた「蟻」同然であったろう。障子堀は敵の侵攻を阻害するばかりでなく、敵を落下させ、曲輪から攻撃する戦法に有効だった。同時に障子堀（横堀）は曲輪と曲輪を完全に独立させて、それぞれの曲輪を機能分化させ、守備と攻撃、両面の強化を図ったことも築城術の発展した姿である。



複列型の障子堀（西の丸西堀）



単列型の障子堀（岱崎出丸）

6. 橋

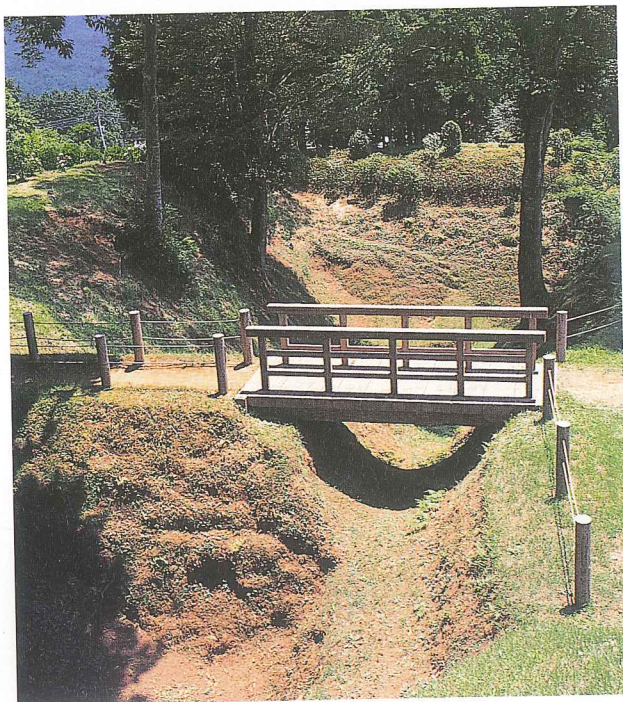
橋には土橋と木橋（掛橋）がある。橋は城外と城内、または曲輪ごとを結ぶ施設として重要である。

土橋は土を盛り突き固めたものと、土橋にする部分を計画的に掘り残したものがある。山中城では後者が多く、土橋上の平場を通路とするだけでなく、土橋左右の水高を調節するためのダムの役割も兼ねており、その典型は、西櫓堀を渡り曲輪虎口までの土橋や、西の丸南堀を渡り虎口までの土橋に認められる。

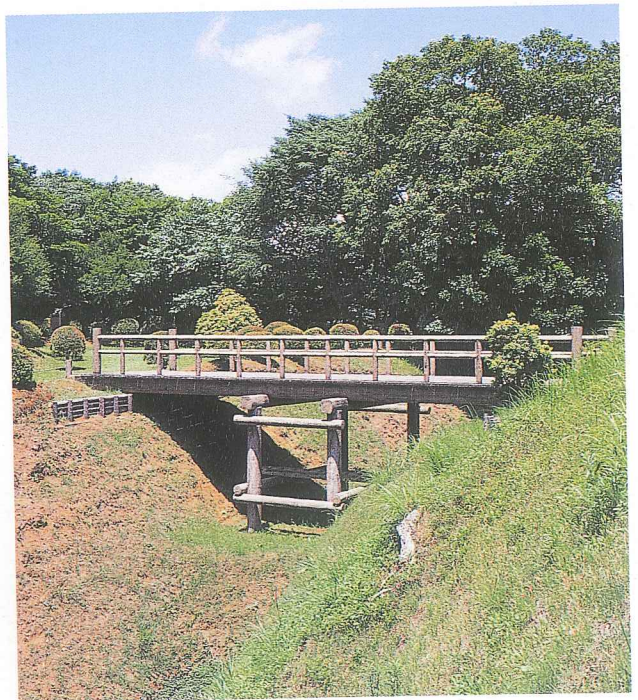
つぎに木橋は、山中城ではその数と種類が多く、復元もされているので山中城の特色の一つにあげられている。すなわち、発掘調査の結果、本丸北堀・本丸西堀・二の丸西堀・西櫓堀で検出されている。ただし、発掘しても木質が遺存する例はほとんど認められない。山中城からは、曲輪の中で土塁が切れる箇所と、それに対応する位置での、相手の曲輪の土塁の切れるあたりを結ぶ堀の中に、橋脚穴（柱痕跡）が検出され木橋と確認された。

二の丸西堀では、確認された橋脚台から、「四本柱の木橋」の存在が実証された。四本の橋脚穴の間隔は約2mであるが、正方形ではない。ここに建てた柱の直径は30cm内外である。橋脚台は意図的にローム層を掘り残したものであるが、本丸北堀の橋脚台は、堀底に盛土して二本柱を立てた簡単なものであった。

橋には土橋と木橋がバトンタッチして機能するものもある。山中城本丸西堀においては、西虎口を出て掘り残された堅牢な土橋を渡ると、この土橋は途中でカットされ木橋となる。これにより、二の丸からの敵の侵入を、木橋を破壊することにより防ぐことが可能となり、また、木橋の下は、本丸から曲輪外へ出る味方の通路として活用できたのである。また『渡辺水庵覚書』には、「三の丸と二の丸間に水堀相見へ、堀の上十間余りの欄干橋有之候………」とあり、箱井戸と田尻の池をまたいで、長さ18mほどの「欄干のついた橋」が存在していたことが記述されている。このような長い橋は、敵軍がこの橋を通過するとき鉄砲戦の標的に都合が良いとされている。



土橋と木橋複合の橋（本丸西堀橋）



木橋（二の丸西堀橋）

7. 建物

山中城には、4,200人の北条軍が守備していたと文書は伝えている。彼らの日常生活に建物は欠くことのできない施設であるが、残された遺構、特に曲輪内に存在が想定される建物はほとんど確認されていない。

山中城においては、戦後の開墾と根菜類の栽培に伴う天地返しがローム層のかなりの深さまで実施されているので、建物に関する遺構は破壊されてしまった。そのような中で、開墾畑や植林を免れたところに僅かに建物が検出されている。

それは兵糧庫の「3間×4間の礎石建物」一棟、西櫓の「掘立柱建物」一棟、元西櫓の「礎石建物」一棟の三棟にすぎない。

戦国時代の山城にあっては、建物は簡素なものであったことは当然であろう。屋根は茅葺きまたは板葺きが普通である。この材料は比較的入手し易いし、茅葺屋根などは民家と同じであるから、伊豆や相模の徴用農民の労働と技術により建設できたのである。しかし、この茅や板は可燃性という点で、致命的な「火矢」を防ぎようがなかった。また落城した城は、二度と使用できないように燃えるものはすべて焼却したようである。二の丸西堀の中からは焼け焦げも生々しい柱材が出土し、この事実を裏付けている。

このほか、北の丸で「搦手門」と考えられる掘立柱建物が平石の階段を伴って検出された。『渡辺水庵覚書』には「三の丸の二階門・二階門丈夫にして」と、山中城に二階門があったことが記述されている。北の丸の門も山中城では最奥部に位置し搦手道にもつながることから、下層は通用門・上層は櫓となり、見張りが監視する二階門が考えられる。また、西の丸をはじめとして、多様な形態・規模の土坑（穴）が検出されたが、遺物も少なくその機能を推定できるものはなかった。一方、曲輪を囲む土塁のコーナー部に、一隅を拡張し櫓台を構築する手法が顕著に見られる。ここに建てられた櫓そのものの構造は不明だが、いずれも曲輪の虎口（出入口）を防備する位置に設営されており、城内の連絡を兼ねた強力な防衛施設であったものと推定できる。



兵糧庫の礎石と復元休憩舎

8. 出土遺物

- (1) 陶磁器 中国産青磁・白磁・染付、国内産瀬戸・美濃・常滑焼など
- (2) 金属製品 槍・石突・腰刀・目貫・笄・火縄銃部品・キセル・ノミ・釘・鍵・鋌など
- (3) 弾丸 鉄砲玉・大筒玉
- (4) 木製品 仏像・桶・楔・杭・貫・柱・梁など
- (5) 漆製品 前立・草摺・弓など
- (6) 石製品 硯・砥石・線刻礫など
- (7) 古銭 祥符元宝・皇宗通宝・嘉祐元宝・熙寧元宝・元豊通宝・元祐通宝・洪武通宝・永樂通宝
- (8) 石器 旧石器時代のナイフ形石器など時代を異にするもの
- (9) その他 江戸時代の陶磁器・銭貨・キセルなど

山中城は国境警備の城であり、臨戦態勢時のみ人員が増強される軍事基地だったので、遺物の出土は調査面積に比較して少なかった。また、これまでに調査した地点が戦闘的な位置にある曲輪が中心で、恒常的な居住区とみられる三の丸の調査が進行していないことにも起因し、曲輪内も開墾時にかなりの遺物が出土し散逸している事実も見逃せない。

しかし、西の丸や兵糧庫では、日常生活用品が比較的多く出土しており、居住施設が存在したことが明らかにされた。一方、西櫓、出丸といった地点では武器・武具の出土が顕著で、曲輪の性格の違いが把握されたことは注目されている。

出土した陶磁器には中国産陶磁器と国内産陶磁器があり、国内産では瀬戸・美濃製品のほか初山、志戸呂など静岡県産品の出土が目立つ。こうした中国産陶磁器、瀬戸・美濃製品、静岡県地元窯製品、かわらけのセットは、後北条氏の城郭出土陶磁器類には一般的な事例で、一つの大きな特徴である。そして、廃城後、東海道山中宿が成立する17世紀中葉までの空白期が見られることから、出土遺物は少なくとも陶磁器研究には良好な資料と言えよう。

武器・武具の出土も同様に量的には多くないが、刀や槍、火縄銃、甲冑など、ほぼ当時の兵士の装備はそろっている。多くの遺物に二次的な焼成が認められ、戦後処理が行われたことが推定できる。

兜の前立や草摺など、皮革や和紙を素材として漆塗り仕上げとしたものもあり、当時の甲冑が極めて軽快な装備であったことが知られる。

また、西櫓や二の丸の土塁上には、人頭大の角礫が多数集石されていた。同様の礫は堀底からの出土も顕著であったため、これらの礫は石礫であったと結論づけている。一方、山中城の堀底や曲輪内からは多数の鉄砲玉や、少数ではあるが大筒玉が出土していることから、火縄銃とともに大筒（大砲）までも保持していたことが明らかとなった。こうした新旧の防衛装備が共存し機能していたことが示されたことは、当時の戦闘システムを考える上で重要な資料といえる。

山中城は戦後の開墾により曲輪内部が破壊されていることから、建造物を推定する資料に欠けている。しかし、西の丸西堀、二の丸西堀では部分的に水堀を形成した区画が存在したことから、柱や貫板、楔など、建築部材が少なからず出土し、山中城における建造物の建築技法、用材の選択とその加工技術を知るうえで貴重な資料となった。

また、小径木を使用した柵の部材も多く、しかも、これを製作した際の削りくずや、手折った小枝なども出土しており、これらは臨戦時におけるあわただしさが窺える資料とも言えるものである。



前立 (日輪)



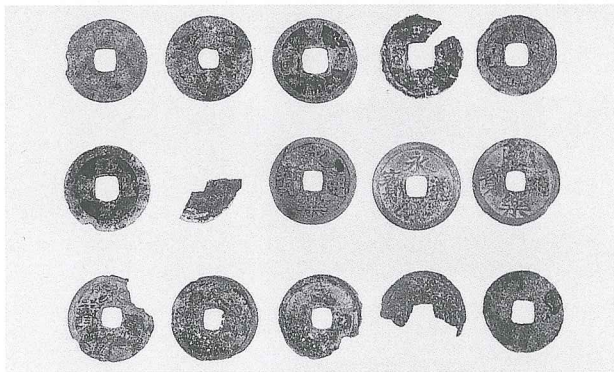
鍔 (当世鍔)



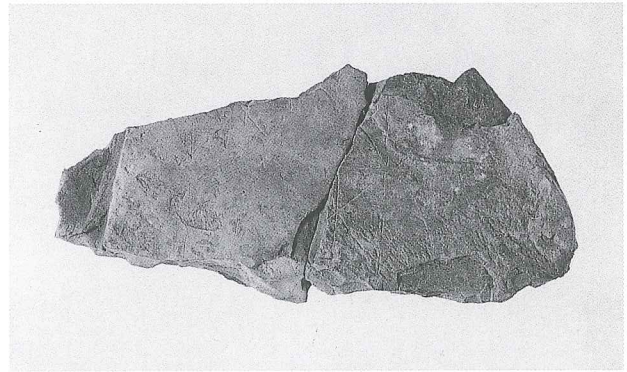
甲冑部品 (小札)



刀装具 (筭、小柄、目抜、こじり、はばき、貴金具ほか)



銭貨 (永楽通寶)



遊技盤 (十六武藏)



甲冑部品・鍋の出土状態 (本丸西堀)



木製品の出土状態 (二の丸西堀)

II 山中城のプロフィール

1. 伊豆山中城「諸国古城之図」

本図の作成年代について、^{やもりかずひこ}矢守一彦著「^{あきのぶんこ}浅野文庫蔵・^{しょこくこじょうのず}諸国古城之図」では、^{てんな}天和3年（1683）頃とされている。山中城落城後、約93年経過している絵図であるから、今日の精密な測量図とは比較にならないが、発掘前の検討資料として重要な資料であった。発掘調査後の所見では、絵図に描かれた堀の位置について高い評価が与えられた。当時の軍学者が現地調査したものであろうか。本丸の位置も適切であり、特に「本丸に二間もひくし」とあるように、本丸が二段に構築されていた状況は発掘結果と合致した。井戸の位置も的確であった。また北方に「^{ものみばんしょ}物見番所」とあるが、絵図に誘導されて現地に登ってみると巨大な「^{からぼり}ほりきり」、つまり空堀が構築されていた。そして山頂の平坦面は「^{ものみやぐら}物見櫓」が構築され、北方監視の適切地であることを示唆していた。南側の「^{けんそ}険阻な山の谷あい」の表記も比高300mの事実を記述している。

ただし、細部の曲輪配置については理解に苦しむ点が多い。たとえば、本丸の北側にある北の丸曲輪は実在するが、その東側の曲輪は明らかではない。また本丸の西方尾根には、二の丸・元西櫓・西の丸・西櫓と曲輪が連なるのであるが、絵図では「外曲輪」の表記だけであとの曲輪は一括されている。また、これらの曲輪には障子堀が巡っていたのであるが、約百年後の作図の時点では埋没していたのであろうか。

絵図の最大の欠点は、^{だいさきでまる}岱崎出丸が描かれていないことである。山中新田の間の^{あい しめく}宿の町並みや、^{そうかんじ}宗閑寺、^{じぞうどう}地藏堂は描かれているが、^{こまがた}駒形・^{すわじんじゃ}諏訪神社は欠落している。

^{そうかつてき}総括的に見ると、本絵図の作図目的である堀や土塁の描き方には^{しんびょうせい}信憑性が認められるが、曲輪配置については^{じつちけんしょう}実地検証が不十分である。このことは、より古い時代の絵図の^{しゃほん}写本ではないかとも考えられる。

しかし、日本の城のなかで絵図の残されている城は極めて少ない。特に中世の山城については浅野文庫諸国古城之図（広島県立中央図書館蔵）が、現状の遺構と絵図とが一致する点が多いと評価されている。



伊豆山中城「諸国古城の図」(浅野文庫蔵)

2. 山中城の創築・修築年代

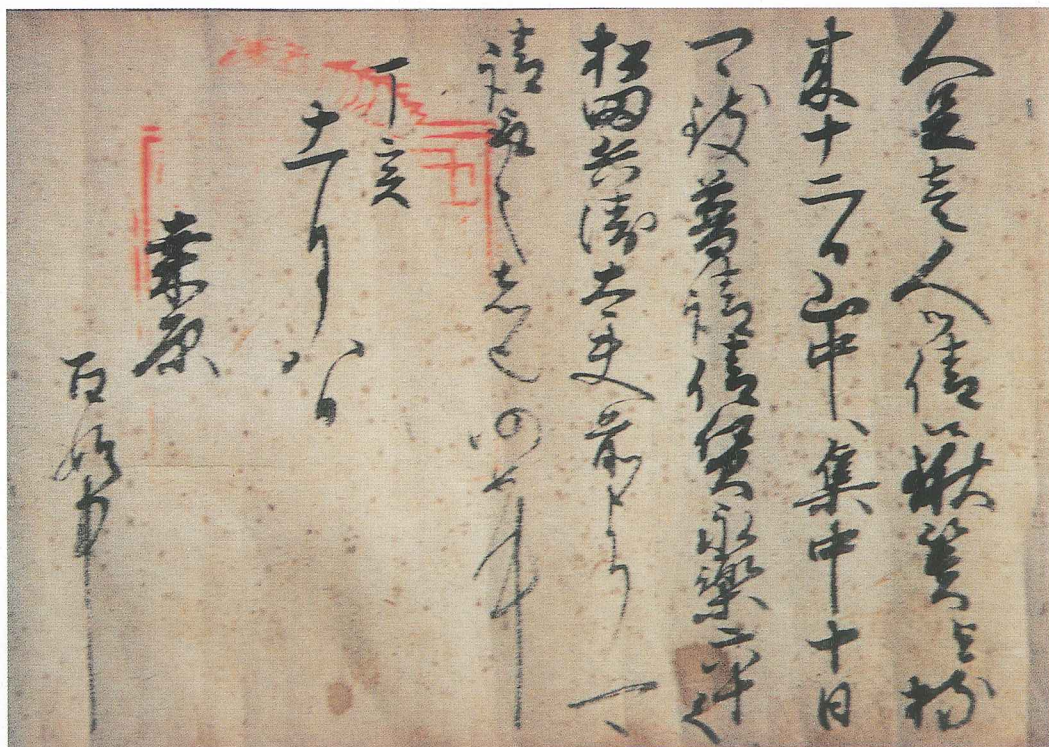
山中城の創築年代は明らかではない。また、発掘調査によって出土した遺物においても創築された実年代は確定できない。ただ『甲陽軍鑑』品第35に「永禄十二年六月二日に、信玄公甲府を御立あり(中略)富士のすそ野へ出陣なされ 悉く焼き払い、にら山・山中迄はたらき、同月十七日に三島を焼き(中略)」とあるので、永禄12年には後北条氏の支城として存在していたことが知れるのである。

このことから、永禄10年(1657)～12年頃が創築着手のころと従来推定されているが、天正18年(1590)の合戦より約23年前にあたる。

天正15年(1587)5月、九州を平定した豊臣秀吉は、矛先を関東以北に向け、関東・奥羽の諸大名に対して「惣無事令」を発した。これは諸大名間の武力による領土紛争などを私戦として禁じたものである。秀吉は小田原の北条氏政・氏直父子に対し、「惣無事令」に従って上洛し、臣下の令をとるように要求したが、後北条氏はこれを拒否した。

函南町桑原の森六夫氏所蔵の虎印判状によると、同年11月8日、後北条氏は「桑原百姓中」に山中城の普請を命じている。同文書によると、戦いの3年前にあたるこの時点ですでに、守将、松田康長が山中城に配置されていたことが分かる。後北条氏の西方防備に対する決意の表れでもある。

天正17年11月24日、秀吉は小田原城の氏直に宣戦布告状を突きつけた。このことを予期していた後北条氏は、12月7日、武具調達の陣触れを領内に出し、同時に山中城の修築に着手した。すなわち「下野の住人、壬生上総介義雄に命じ、縄張りを修めさせ、堀を掘り、さらに岱崎を増築せしむ」とある。秀吉の宣戦布告後、急遽、出丸の増築は開始されたのであるが、僅か3ヶ月あまりの日数しか残されていなかった。出丸の増築は途中放棄された。その様子が現在発掘調査され復元されている。



北条家朱印状 (森文書)

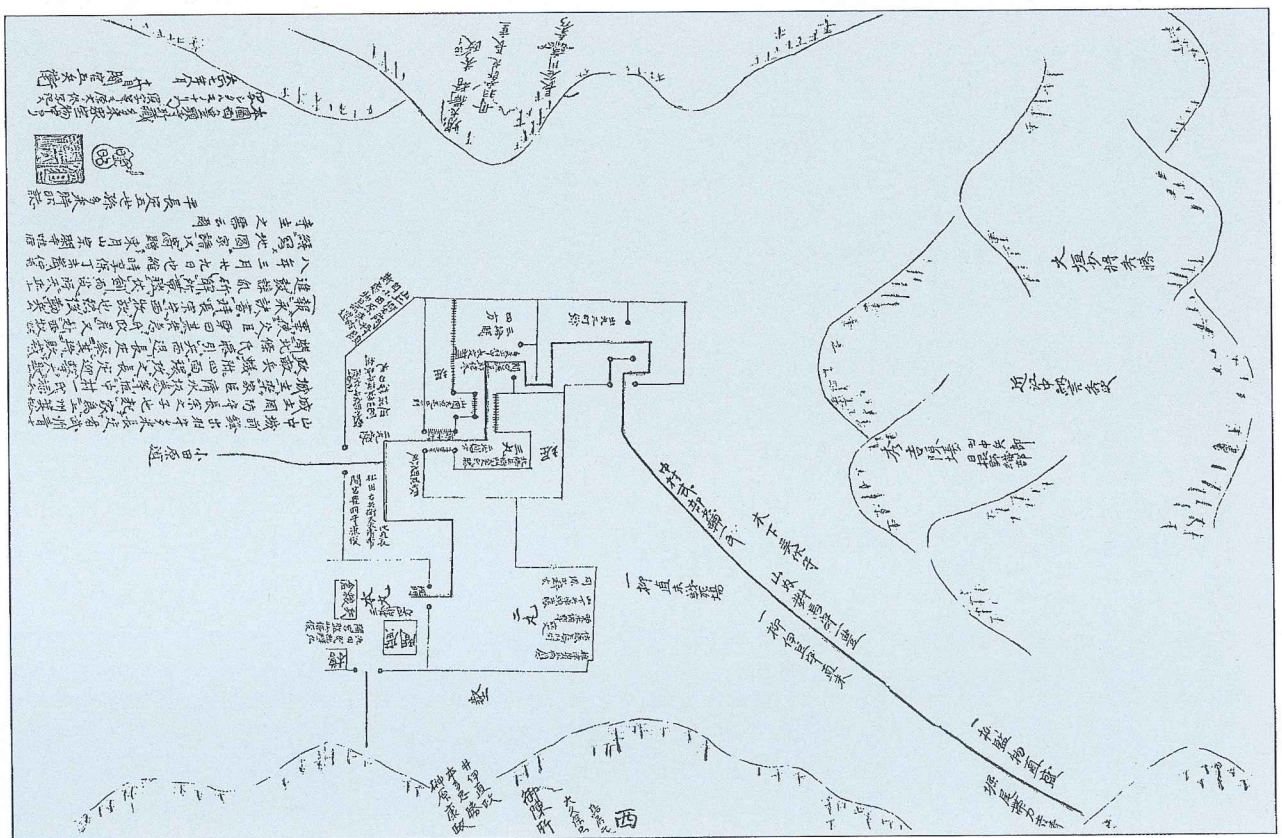
3. 三の丸内を街道が通過

山中城は、自然の要害地のなかでもすぐれて深く、^{けんそ}険阻な谷を活用して立地している。したがって、城の選地も、^{だんがいげっぺき}通路も、断崖絶壁上に構築しなければならない。戦国末期のこのあたりの交通路は、箱根峠に向かう尾根道の東海道・^{たまざわうわみち}玉沢上道・^{にらやまおうかん}葦山往還の葦山辻から、葦山城に通ずる山道を、巧みに城内の三の丸に誘導している。

山中城の特徴の一つに、主要街道を城内に導入し、交通の要地を^{かんぜんしょうあく}完全掌握していることがあげられる。常識的には山城といえども^{ぐんじきみつ}軍事機密なので、城内は^{かいどうすじ}街道筋から見えなように工夫するものである。それを後北条氏はあえて城内の一部を通過させた。たとえば、^{あしがらじょう}足柄城や^{ゆざかじょう}湯坂城も同様な道路政策をとっている。これは、城は^{ぼうび}防備だけでなく、街道を押さえる^{かん所}関所の役割を創築当初から持たせたからに他ならない。

山中城^{だいさきでまる}岱崎出丸には、かつて「水呑の関所」があったと伝えられ、また、^{けんむ}建武2年(1335)、鎌倉幕府滅亡の時に合戦の舞台となったところが、^{なんしよ}街道第一の難所であった「水呑峠」と太平記に書かれており、その地を山中城とする説もある。しかしながら、現在その遺構を確認することはできない。

いずれにしても、後北条氏の「境目の城」である山中城は、箱根の玄関口を押さえる関所でもあった。関所の機能を発揮させるために、城内三の丸に街道を通過させた。三島方面から尾根道を登り、玉沢方面や葦山方面の道と合流させ、山中城^{だいさきでまる}岱崎出丸直下を通過し、必然的に三の丸へ足を踏み入れるように街道は設営されていた。現在も南橋跡とよばれている^{がらんはいち}地藏堂や宗閑寺の伽藍配置などに、関所としての機能を十分に果たせる段差や土塁跡などを確認できるのである。



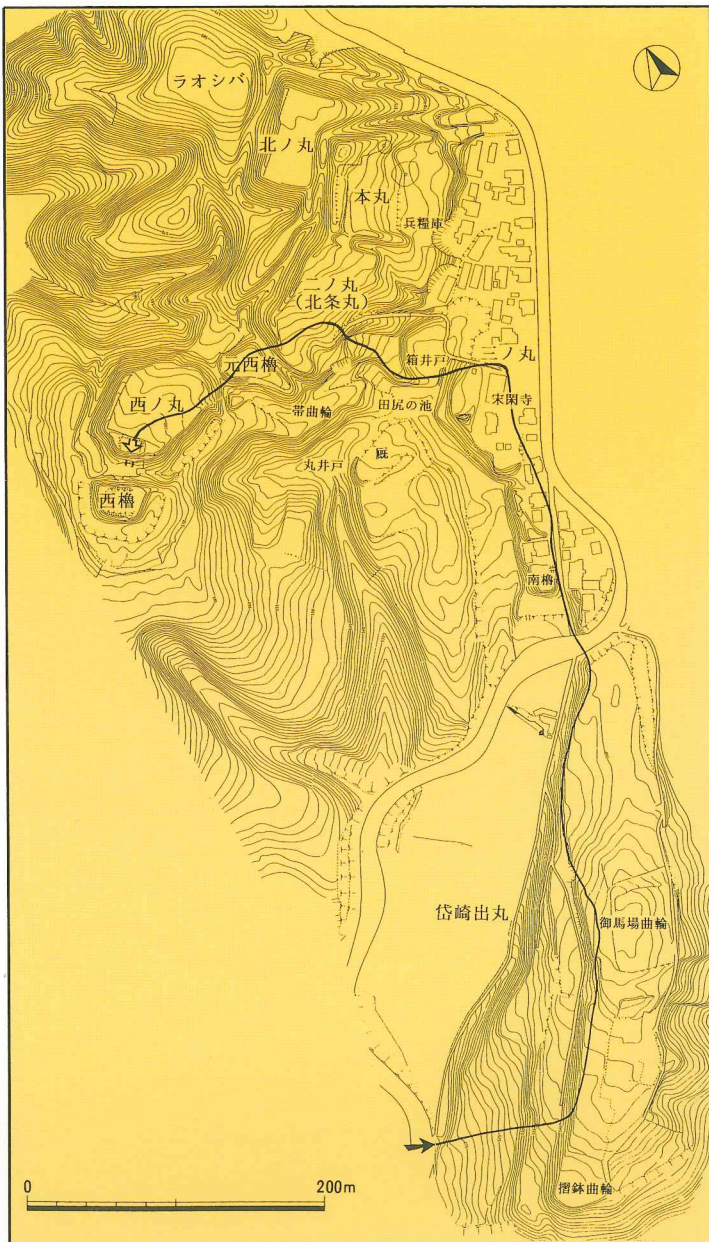
山中城図 (1918年 間宮五兵衛写真)

4. 『渡辺水庵覚書』と鉄砲

静岡県には戦国時代の山城が多く築城されていたが、山中城のように具体的に戦闘状況が分かる山城は存在しない。山中城の戦闘の様子を書き残したのが渡辺勘兵衛^{わたなべかんべえさとる}で、彼は水庵^{すいあん}と号し、寛永17年(1640)、79歳で終わる一生を戦いの場で生き抜いた人物である。山中城合戦の時は29歳の働き盛りで、秀吉軍の先鋒^{せんぽう}であった中村一氏^{なかむらかずうじ}を主人として、一番槍^{いちばんやり}の抜群の手柄をたてたのである。戦後、彼の書いた戦闘記録の『渡辺水庵覚書』によると、戦いの80%は鉄砲戦のようであった。さすが秀吉と関東の雄、後北条の決戦である。当時の鉄砲は高価であり、しかも生産地^{しょうあく}を掌握し、火薬や鉛を調達できるだけの莫大な資金が必要なので、並の武将では装備できないのが鉄砲であった。ただ、火縄銃は雨に弱く連続発射できない欠点

があり、総体的には攻撃より守備軍側に利用価値は高かったようである。

『渡辺水庵覚書』には8箇所も鉄砲戦の様子が記述されている。戦いの火ぶたは3月29日正午ころ、秀吉軍が待機する出丸前面の3箇所から、20丁~30丁の鉄砲が撃ちかけられて開始された。これに対し、守備する北条軍も鉄砲をつるべ打ちして応酬^{おうしゅう}している。勘兵衛の立つ位置から山中城の出丸まで約100mあり、当時の火縄銃は約100mは飛び、連打^{れんだ}してきたようである。ただし、この100mはどうも射殺可能距離ではなさそうで、勘兵衛も平然と立って状況を観察している。『渡辺水庵覚書』によれば、三の丸虎口(入り口)では、「秀吉軍の中で敵の鉄砲^{けん}・鉄砲筋^{すじ}にある三十間^{けん}を駆け抜けてきた者のうち、四人は弾にあたり絶命してしまった」とある。つまり30間、約54mの距離が射殺可能な距離だったことがわかる。戦国時代は弓矢15間・鉄砲30間といわれ、初期の鉄砲でも弓矢の倍の威力はもっていたものである。これを裏返すと、50mの堀の幅があれば鉄砲玉は届かず安心であり、韮山城の城池の幅が約50mあるので、籠城^{ろうじょう}していても鉄砲の轟音^{ごうおん}に慣れれば怖くなく、そのためこの堀幅は3ヶ月も籠城できた一因かも知れない。



渡辺勘兵衛侵入推定図

5. 出土した三種類の鉄砲玉

山中城からは、197発(個)の鉄砲玉と3発(個)の大筒玉^{おおづつたま}が出土した。日本一の出土量を誇る鉄砲玉を整理して観察すると、玉の表面が三色(白色系・赤色系・青緑色系)あることがわかった。早速、この鉄砲玉の成分分析を静岡県工業試験所に依頼したところ、驚くべき事実が報告書に記入されていた。

第一に白色に表面が変化^{ゆうかいてん}した玉は、従来、火縄銃の玉と伝えられてきた、鉛を主成分とした鉛玉である。この鉛玉の長所は、融解点が327度と低いので、戦場で容易に製造できるが、欠点は、命中しても破壊力が低いことである。山中城では25発しか出土しておらず、あまり使用されていなかったということである。

第二の赤色に表面が変化^{はくり}した玉は、僅かに19発しか出土していない鉄玉である。鉄玉は重すぎて遠くへ飛ばず、一発撃つと表面が剥離して、火縄銃の弾道に鉄アカを残すので、弾道掃除が大変であるばかりでなく、溶解温度が1,135度と非常に高いため製造が困難で、通常、練習に用いていたようである。

第三の表面が青緑色に変化した玉の成分は、銅^{どう}と鉛^{なまり}と錫^{すず}の合金^{ごうきん}だった。この玉は出土量が最も多く、147発で全体の77%を占めていた。その理由は鉛玉と比較して、破壊力、殺傷^{さっしょうりょく}力が優れている点にある。ただ欠点は合金なので、融解点は980度であり、戦場で素人が製造するのは無理のようである。鑄張^{いばり}の残っている玉もあるので、鑄型^{いがた}に入れて製造したものである。山中城において出土量が最も多い事実は、後北条氏は鉛玉をこの鉛青銅の玉に工夫改良して使用していたことを実証するものである。

出土した197発の鉄砲玉はすべて未使用玉であり、大きさはパチンコ玉と類似している。ただ同一ではなく、大きさに随分バラツキがある。いずれもイビツで真円でない。真ん丸でないと飛距離も伸びず、命中率も極めて悪い。火縄銃は1発撃つごとに筒掃除が必要であるが、戦闘時は筒掃除などのゆとりはなく、だんだん玉の大きさを小さくしたのであろうか。



出土した火縄銃部品と鉄砲玉 (上段：鉛青銅玉、中段：鉛玉、下段：鉄玉、部品左：火挟み、部品右：毛抜きバネ)

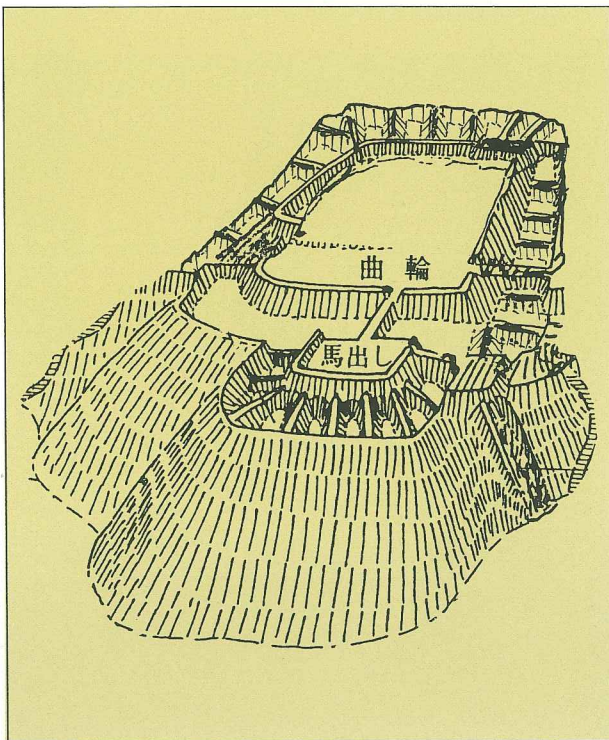
6. 北条流の角馬出

戦国時代の山城で、二つの虎口(出入り口)と一つの広場が組み合わせられたものを特に「馬出」と呼んでいる。すなわち、堀を挟んで二つの曲輪があるときに防御のための出入り口を内側につくり、攻撃のための出入り口を堀の外側に出した広場に作ったものである。

馬出を独自に創案したのは後北条氏・武田氏・織田氏などである。完成した馬出の出現は、武田氏や後北条氏では永禄年間(1558~1569)に遡ると考えられている。馬出は、中世の山城のなかでも最も手のこんだ虎口である。もし山中城の西の丸へ突入しようとするときには、まず西櫓の曲輪を包囲する西櫓堀を越えて西櫓の広場を突破し、直角に曲がって今度は西の丸の障子堀を越えねばならない。堀を渡ると西の丸の虎口にやっと到達できる。その門も厚く防御されていることは言うまでもない。

西の丸から堀を越えて前に突き出た西櫓の曲輪は、四角(長方形)に構築して、それに沿って土塁と堀をめぐらす。したがって、後北条氏の馬出は「角馬出」と呼ばれている。防御するときは西の丸で、攻撃に出るときは堀の外側の西櫓に広場を設けて、ここを起点として攻撃態勢をとる。西櫓から西櫓堀を越えるには、徒歩なら堀の北端に架けられた木橋を渡り、乗馬なら堀の南端の土橋を渡り出撃する。このように馬出により、攻める機能と守る機能が明らかに区別されたのである。

武田氏は、馬出の土塁と堀を丸く構築したので「丸馬出」と呼ばれている。この丸さが通称「武田のみかづきぼり三日月堀」となる。しかし三日月堀のある場所に必ず虎口があるとは限らない。山城は常に取ったり、取られたりする。そのたびに自分たちに都合の良いように改築される。丸が四角になり、四角が三角になることもあるだろう。こうしたことから、始めから終わり(創築~落城)まで、後北条氏のみが支配した山中城は、馬出の研究資料としても貴重である。



角馬出の構築(『城館調査ハンドブック』に加筆修正)



角馬出全景(西櫓)

7. 箱井戸と田尻の池

山中城には約4,200人の将兵が籠城したと伝えられている。当時、4,000人分の城内における給水の可否は、一城の生死に関係するものだけに、築城にあたっては、まず、水の手、井戸を確保しなければならなかった。多くの山城は谷間に井戸曲輪を設け、水の手を厳重に保護した。こうした曲輪は、敵に知られたくない隠し曲輪なので、曲輪の呼び名もつけず「無名曲輪」と称したようである。

後北条の支城である葦山城でも、3ヶ所に井戸が所在したことは、寛政年間に描かれた古図に示されている。山中城絵図では明らかではないが、地元の伝承地名に「箱井戸・丸井戸・ざぶの井戸」などがあり、さらに自然の湧き水が「西の丸北側の谷間や、三の丸北側の箱井戸付近である」とのご教示があった。

『渡辺水庵覚書』では、箱井戸のあたりを「三の丸と二の丸の間には水堀があり、その上に欄干橋が架かっていた」と書かれている。これにより貯水池であったことが知れ、土地の人々は「箱井戸」と呼び、最近まで飲料水としていた。

そこで、発掘は、葦に覆われた湿地帯だった箱井戸周辺を調査したのであるが、井戸枠は検出されず、長方形の巨大な貯水池であることが、池のなぎさ線から判明した。そして、その余り水は導水路により一段下がった田尻の池に流され、そこにも貯水する遺構が検出された。すなわち、この付近一帯の沼沢地を二つの貯水池に区画するために、ローム土を盛土して土塁を構築してあったのである。

つぎに田尻の池の調査により、西側は古くから厩(馬舎)跡と伝えられていた場所であり、また治水の排水される自然の谷側には、粘土質の土で堰堤を造り谷を区切って貯水していたことが明らかにされた。さらに馬舎に近い場所に、馬が水を飲んだり体を洗う場なども池に張り出して設けられていることがわかった。箱井戸と田尻の池は、両者共に貯水池だった。なぜ、二つ造成したのだろうか。それは人と動物の水を区別したのである。山城で一番注意するのは、水による伝染病の発生だったのである。



箱井戸 (箱井戸から田尻の池と馬舎を望む)

8. 屋根に葵紋の宗閑寺

天正18年(1590)3月29日、豊臣秀吉の小田原攻めのとき、間宮康俊は未完成の岱崎出丸の守将として120人の兵とともに最前線を死守した。出丸の守備軍は、火縄銃を装備した鉄砲隊が80人、長槍隊が30人、大筒3門の編成で敵の大軍と戦ったと戦記物に書かれている。『渡辺水庵覚書』によると、当日の戦いは出丸から開始され、間宮軍の鉄砲隊がつるべ撃ちして渡辺勘兵衛の突撃を阻んだようである。後北条守備隊は、特に一柳直末の部隊や中村一氏の小隊を全滅させるほど奮戦したのであるが、17倍の豊臣軍にはかなわず、一族、枕を並べて討ち死にしている。

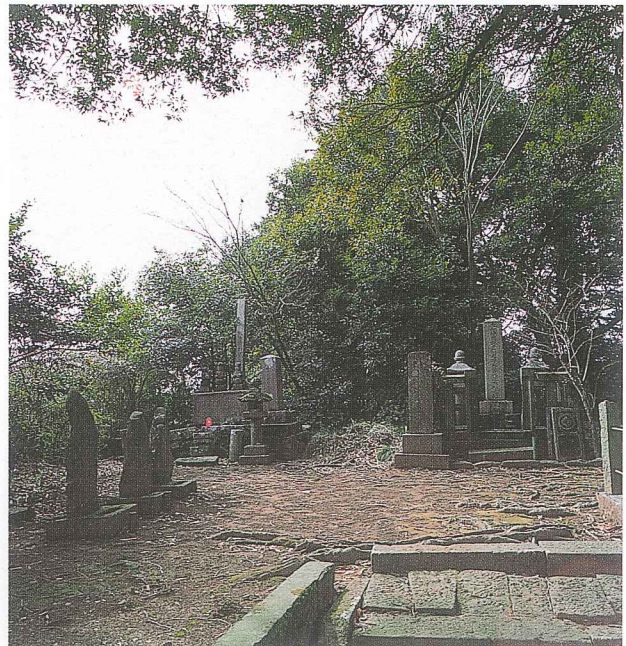
この山中城の出丸を死守した間宮康俊の長女について、「父、康俊戦死のち東照宮(家康)の御側近くつかへたてまつり、こふて父が葬地に一寺を開基し、宗閑寺と号す」と『寛政重修諸家譜』に見られる。

天正18年(1590)山中城は落城した。このときに間宮一族は全員戦死。「敵ながらあっぱれ」と感動した家康は、間宮一族の冥福を祈りたいという康俊の娘(家康の側室となる)の願いを聞き入れ、山中城三の丸の一角に宗閑寺を建立することを許し、その開山を了的和尚に依頼した。山中城は後北条氏なので家紋は三ツ鱗である。しかし宗閑寺は家康の建立であるので、その屋根には葵の紋が飾られている。宗閑寺が建てられたのは、元和年間(1615~1623)であろうと推定されている。当初の伽藍は火災で焼失し、記録が残っていないのは残念だが、江戸時代には参勤交代の特定大名が休憩した寺であった。

宗閑寺には敵・味方の石碑が苔むしている。間宮一族では、間宮豊前守康俊・間宮監物信俊・間宮源十郎信冬であり、山中城の守将松田右兵衛大夫康長・箕輪城主多米出雲守長定・長谷川志摩守平近秀・追沼帯刀先生平氏雅などの武将たちと、豊臣軍の大將であった一柳伊豆守直末である。直末は部下300人とともに中央突破軍の先頭を突撃し、北条軍の鉄砲弾に命中し戦死した。秀吉は「小田原城にも替え難い人物を失った」と、食事の箸を落として嘆いたそうである。



宗閑寺本堂



墓碑(左奥:間宮・松田、右:一柳、左手前:北条方武将)

● 史跡山中城跡関係刊行文献一覧

- 三島市教育委員会 1974 『史跡山中城跡発掘調査概報－第一次調査－』
三島市教育委員会 1975 『史跡山中城跡Ⅱ－昭和49年度発掘調査・整備事業概報－』
三島市教育委員会 1975 『山中城文献資料集』
三島市教育委員会 1976 『史跡山中城跡Ⅲ－昭和50年度発掘調査・整備事業概報－』
三島市教育委員会 1978 『山中城跡環境整備基本構想』
三島市教育委員会 1980 『史跡山中城跡Ⅳ－昭和51～54年度発掘調査・整備事業概報－』
三島市教育委員会 1980 『史跡山中城跡へのいざない』
三島市教育委員会 1984 『史跡山中城跡』－第1分冊－
三島市教育委員会 1985 『史跡山中城跡』－第2分冊－
◎三島市教育委員会 1985 『史跡山中城跡』(合本)
三島市教育委員会 1987 『発掘 復元された史跡山中城跡』
三島市教育委員会 1988 『史跡山中城跡Ⅴ－昭和62年度発掘調査・整備事業概報－』
三島市教育委員会 1989 『史跡山中城跡Ⅵ－昭和63年度発掘調査・整備事業概報－』
三島市教育委員会 1990 『史跡山中城跡Ⅶ－平成元年度発掘調査・整備事業概報－』
三島市教育委員会 1992 『史跡山中城跡Ⅷ－平成2・3年度発掘調査・環境整備事業概報－』
三島市教育委員会 1992 「史跡山中城跡第15次発掘調査」『三島市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』
三島市教育委員会 1993 『史跡山中城跡Ⅸ－平成4年度発掘調査・環境整備事業概報－』
◎三島市教育委員会 1994 『史跡山中城跡Ⅱ－国指定史跡山中城跡の環境整備に伴う発掘調査報告書－』
三島市教育委員会 2001 『史跡山中城跡－発掘調査と環境整備事業の概要－』
◎印は特に山中城を深く研究するための基本資料です。すべて三島市立図書館で閲覧することができます。(TEL 055-983-0880)

● 協力機関

広島市立図書館 三島市郷土資料館

● 執筆・監修

齋藤 宏 (三島市文化財保護審議委員長)

● 写真撮影・編集

鈴木敏中 (三島市教育委員会 教育部 文化振興課 主任学芸員)

● 山中城跡への交通機関

JR東海道本線三島駅から元箱根行きバスで山中城跡下車、徒歩3分。

● 史跡山中城跡に関する問い合わせ先

三島市教育委員会 教育部 文化振興課 〒411-0858 三島市中央町5番5号

TEL 055-(983)-2672 FAX 055-(972)-3304 E-mail bunka@city.mishima.shizuoka.jp

URL <http://www.city.mishima.shizuoka.jp/bunka/index.htm>

● あとがき

本書は史跡山中城跡の概要説明書です。山中城跡は昭和9年に国の史跡に指定され、全国に先駆け、昭和48年から発掘調査と環境整備事業が開始されました。そして、平成5年をもってすべての事業が終了し、現在、「山中城跡公園」として一般公開されております。全域が緑の芝生に覆われた城跡は、後北条流築城術が実際に見学できる歴史学習の場として、あるいは四季折々に咲く、さまざまな花が楽しめる憩いの場として、県内外の多くの人々に親しまれており、全国の城館跡整備のモデルともなっております。三島市教育委員会では、これまで、山中城跡に関する平易な解説書として「史跡山中城跡へのいざない」や「発掘・復元された史跡山中城跡」を刊行してまいりましたが、多方面からの頻繁な要望があり、すべて絶版となってしまいました。このため、この度、内容を一新し「北条流角馬出や障子堀の残る山城」として刊行したものです。発刊にあたっては、山中城跡の調査団長として、17年間の長きにわたって発掘調査の指揮を執られた齋藤宏先生に原稿の執筆をお願いし、玉稿を賜りました。山中城跡を大変わかりやすく、また、詳細に解説された本書を供として山中城跡を探訪され、戦国時代の終焉を告げた「山中城合戦」に思いを馳せていただけるとするならば、望外の喜びと存じます。

© 2002

史跡 山中城跡

— 北条流角馬出や障子堀の残る山城 —

発行年月日
編集・発行
印 刷

平成14年3月30日
三島市教育委員会
㈱東海印刷